

○ 単元「おみやげの三つ山まんじゅうをつくろう」（寄島小学校）

1 単元指導計画

1-1 単元「おみやげの三つ山まんじゅうを作ろう」（全24時間）

担当者 藤原万知子 田中 圭子 遠藤 誠

1-2 単元設定の理由

（1）子どもの実態

本学年の子ども（男子29名，女子32名，計61名）は，昨年度までの生活科の経験により，体を動かしたり，物を作ったり，野菜や米を栽培したりすることが好きで，意欲的に取り組むことができる。

1学期には，社会科見学で，老人福祉センターや総合福祉センターを訪れ，みんなで使う施設があることを学習した。また，「だいすき寄島わくわくたんけん」では，寄島の「ステキ」を探そうと話し合い，グループに分かれて校区を歩いて調べた。青佐の海岸，お酒や帽子の会社，三つ山など寄島には「ステキ」と自慢できる場所がたくさんあることに気付く，地域の生活や文化に触れることができた。その中で，寄島町には，とても景色のよい「三つ山」があることや，その山にちなんだ和菓子「三つ山まんじゅう」があることを知った。グループでの活動であったため，地域の特色に気付いたり，地域への愛着をもつことが十分にできなかった。そこで，船穂小学校との交流を設定し，地域のことを伝える相手意識をもたせたことで，より意欲的に地域のことを調べたり，親しんだりしようとする気持ちが高まった。

（2）教師の願い

本単元は，このような活動の流れを引き継ぎ，地域のことを探る手がかりになり，また，交流のおみやげにつながるよう三つ山を取り上げていこうと考えた。

このため，本単元では，船穂小学校の友達へおみやげとして持っていくために，三つ山まんじゅうの作り方を調べ，自分たちの力で作るという活動を通して，地域の文化に親しんだり，地域への愛着をもったりすること（「地域ア，ウ」）ができるようにしたい。

また，三つ山の見学や三つ山まんじゅう作りの活動ではそれぞれに詳しい地域の方に来ていただき，話を聞いたり，一緒にまんじゅうを作ったりすることを通して，地域の人たちの思いや願いを知り，地域の人たちの工夫や努力を知ること（「地域イ」）ができるようにしたい。

おみやげのまんじゅう作りを通して，友達と知恵を出し合いながら追究を深め，三つ山まんじゅうを手がかりとして，寄島に思いを寄せる子どもに育てて欲しい。

1-3 単元の目標

三つ山まんじゅうについて調べたり，友達と協力してよりおいしいまんじゅうを作ったりする活動を通して，寄島町の名勝である「三つ山」に対する人々の思いや願いに気付く

とともに，地域の文化に親しんだり，地域への愛着をもつことができる。

1-4 単元の評価規準

○関心・意欲・態度

- ① 三つ山や三つ山まんじゅうについて関心をもち，進んで調べようとする。
- ② 友達と協力しながら，意欲的に三つ山まんじゅうを作ろうとする。

○思考・判断

- ① 三つ山まんじゅうについて自分の考えをまとめたり，おいしいあんを作るひみつについて考えたりすることができる。
- ② 三つ山に対する人々の思いや，三つ山まんじゅう作りで学んだことから，寄島町のよさを再発見することができる。

○技能・表現

- ① 三つ山や，三つ山まんじゅうについて調べたことを分かりやすくまとめたり，発表したりすることができる。

○知識・理解

- ① 三つ山や三つ山まんじゅうは，寄島町の地域を代表する特色あるものであることを知る。
- ② 三つ山や，三つ山まんじゅうに込められた地域の人々の思いや願いを知る。

1-5 学習過程と評価計画

学 習 活 動	支 援 (方法・内容)	評 価 規 準				評 価 資 料	
		関意態	思判	技表	知理		
1 三つ山や三つ山まんじゅうについて調べる。《8》 ① おみやげの相談をし、三つ山の由来について聞く。(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・船穂小の友達のおみやげは、特産物のマスカットにちなんだゼリーだったことにより、自分たちも寄島を代表する物(三つ山まんじゅう)をおみやげにしようという意識を高めるようにする。 ・現地にボランティアティーチャーの方に来ていただき、三つ山の名前の由来や地域の人々の三つ山に対する思いが分かるように話していただくよう事前に打ち合わせをしておく。 ・意欲的に話が聞けるようにするために、三つ山に関するクイズを作る活動を設定する。 	①				振り返りカード①	
			②			振り返りカード②	
	② 三つ山や三つ山まんじゅうについて調べ発表する。(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・初めに調べる内容や方法について話し合うことにより、一人一人が目的をもって進んで調べられるようにする。 ・本物の三つ山まんじゅうを試食し、意欲をもたせたり、調べる手がかりにさせる ・友達の発表が意欲的に聞けるように、学習カードに付け足しの欄を設けておく。 	①		①	①	わくわくノート 学習カード①
			①		①		発表している場面の観察 学習カード①への付け足し
2 三つ山まんじゅうのあん作りをする。《9》 ① 1回目のあん作りをする。(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・あん作りの作業が見通しを持って行えるように、グループのレシピを考えるようにする。 ・保護者ボランティアには安全面に気をつけながら様子を見守ると共に、活動の経過を記録して後の話し合いに参加しても 		②			あん作りをしている場面の観察 振り返りカード③	

<p>② 2回目のあん作りをしあん作りのひみつをまとめる。(5)</p>	<p>らうようにお願いしておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の経過が記入しやすいカードを作成し渡しておく。 ・作ったあんを試食しながらグループでの話し合いを深めるように助言する。 ・まんじゅう作りのひみつを確かめるため地域の名人さんに来ていただき一緒にあん作りをする。 ・名人さんには、あん作りのひみつだけでなく、三つ山まんじゅうへの地域の人の思いや願いを話してもらおうよう打ち合わせをしておく。 ・作り方の順番や、気を付けることを大切にまとめて助言する。 		<p>①</p> <p>①</p> <p>②</p> <p>①</p>		<p>振り返りカード③ 対話</p> <p>振り返りカード④</p> <p>振り返りカード④</p> <p>学習カード②</p>
<p>3 三つ山まんじゅうを作る。《9》</p> <p>① 自分たちで試食するまんじゅうを作る。(4)</p> <p>② おみやげにもっていく三つ山まんじゅうを作りとまとめのカードを書く。(5)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・皮は教師が用意しておく。 ・保護者ボランティアには安全面に気を付けながら様子を見守るようにお願いしておく。 ・おみやげを渡す友達のことを考えながら作るように意識づけをする。 ・保護者ボランティアには安全面に気を付けながら様子を見守るようにお願いしておく。 ・がんばって作った三つ山まんじゅうや三つ山に対する思いが表現できるよう、書く時の視点を示しておく。 	<p>②</p> <p>②</p> <p>②</p>			<p>振り返りカード⑤</p> <p>振り返りカード⑥</p> <p>学習カード③</p>

1-7 学習活動 評価基準

学習活動	評価基準	学習活動における 具体的な評価基準	評価資料	評価基準		
				A (3)	B (2)	C (1)
1 ① おみやげの相談の由来について聞く。	関心・意欲・態度 ①	おみやげに何を持ったらよいか自分の考えをもつ。	振り返りカード ①	おみやげに何がいいかを書いている。	おみやげに何がいいか、書いていない。	
	知識・理解 ①	三つ山は青島町を代表する特色ある場所であることに気づく。	振り返りカード ②	クイズを3問以上作っている。	クイズを作れない。	
	思考・判断 ②	三つ山に対する地域の人の思いを自分なりに考えている。		教師のクイズに答えを書いている。	教師のクイズに答えを書いていない。	
1 ② 三つ山や三つ山まんじゅうについて調べ、発表する。	関心・意欲・態度 ①	三つ山や三つ山まんじゅうについて進んで調べようとする。	わくわくノート	調べたいことを3つ以上書いている。	調べたいことを書いていない。	
	技能・表現 ①	三つ山や三つ山まんじゅうについて調べたことを、分かりやすくまとめている。	学習カード①	調べたことを内容ごとに整理して書いている。	まとめることができない。	
	技能・表現 ①	三つ山や三つ山まんじゅうについて調べたことを、分かりやすく発表することができる。	発表をしている場面の観察	聞きやすい速さで友達に聞こえるように発表している。	友達に聞こえる声で発表できない。	
2 ① 1回目のあん作りをする。	関心・意欲・態度 ①	三つ山や三つ山まんじゅうについての発表を進んで行う。	学習カード①	学習カードへのつけたしを6つ以上している。	学習カードへのつけたしが4つ以下である。	
	関心・意欲・態度 ②	友だちと協力しながら、あん作りに取り組む。	あん作りの場面の観察	グループの中心になって、あん作りを進めている。	友だちと一緒に、あん作りができない。	
	思考・判断 ①	自分たちの活動を振り返り自分なりのおいしいあんを作るひみつを考えている。	振り返りカード ③	協力してがんばったことが、5つ以上の☆のうち3つ以上書いている。	協力してがんばったことが5つ以上の☆のうち1つ以下しか書けていない。	
			振り返りカード ③	友達やボランティアと話し合った後で、自分なりにおいしいあんを作るひみつを書いている。	おいしいあんを作るひみつを書いていない。	

2 授業と評価の実践

2-1 指導と評価の一体化の実践

- (1) 学習活動1 おみやげの相談をし、三つ山の由来について聞く。

① 指導・学習の過程

1学期に船穂小学校と第1回目の交流会を開いた。船穂小学校の友達が寄島小学校に来てくれて、寄島小学校の学校探検や「寄島のステキ」の発表会を開いたり、青砂の海岸で遊んだりして、楽しく過ごした。その時、「ぶどうゼリー」をおみやげに作ってきてくれた。全員が口をそろえて、「おいしい。」と言った。「ぼくもおみやげを持って、船穂小学校へ行きたい。」「おみやげは何がいいかな。」と、「ぶどうゼリーを食べながら、おみやげの話でもちきりになった。

「おみやげの相談をする」では、まず、船穂小学校の友達がなぜ、「ぶどうゼリー」を持って来てくれたと言うことについて話し合うことにした。次に、おみやげを何にするかについて話し合った結果は「みかんゼリー」が圧倒的に多かった。この時点では、教師の願いとは異なる結果となっていた。おみやげの決定はしないまま、次の活動に進んだ。「三つ山の由来について聞く」ということで、地域のことに詳しい大島先生に現地に来ていただいて三つ山を見ながら、三つ山の由来、伝説、寄島町民が三つ山に思うことなど、数々の話を聞いた。数日後、「おみやげの相談をしよう。パートⅡ」で再び話し合いをした。船穂小学校の友達が喜んでくれるのは何かと話し合った結果、「三つ山まんじゅう」に決定した。

② 評価結果

9月9日（振り返りカード①）

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
関心・意欲・態度①	おみやげに何を持っていったらよいか自分の考えをもつ。	57人	1人	2人

③ 指導の改善と実施

「船穂小学校へおみやげを持っていきたい。」という気持ちはどんどんふくらんでいき、おみやげを何にするかの話し合いは活発にできた。しかし、子どもの話し合いの方向が教師の考えているものとは異なっていたので、次の活動へ進むことを急がず、時間をかけて、子ども達の思いをしっかりと発表させるようにした。そして、おみやげの話し合いは、三つ山見学の後にするように活動計画を変更した。その結果、子ども達は前回の話し合いの時よりしっかりと自分の考えをもつことができ、時期的なことや寄島町の名物などを考慮に入れた、深まりのある話し合いができ、「おみやげは三つ山まんじゅうにしよう」とい

うことに決まった。その結果、57人の子どもが関心・意欲・態度①の評価規準3に達した。評価基準1の2人の子どもについては、三つ山見学後の話し合いにより、おみやげに何がいいかのじぶんの考えをもつことができた。この段階で、予定通り次に進んだ。

④ 評価結果

9月26日（振り返りカード②-①）（知識・理解①）
（振り返りカード②-②）（思考・判断②）

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
知識・理解①	三つ山は寄島町を代表する 特色ある場所であることに気づく。	32人	25人	3人
思考・判断②	三つ山に対する地域の人々の 思いを自分なりに考えている。	31人	27人	2人

⑤ 指導の改善と実施

知識・理解①では、三つ山の見学に行き、三つ山を見ながら、現地に来ていただいた大島先生の話聞くことで三つ山の由来についてよく理解することができた。そのため、「三つ山クイズ」もスムーズに作ることができ、評価結果3が32人、評価結果2が25人と言う結果になった。評価結果1の3人の子どもについては、友達が作った「三つ山クイズ」をヒントにするよう助言すると、自分が作れそうなクイズを選んで、自分のクイズを作ることができた。

思考・判断②について、同じ時間の設定であったが、「内容的に難しい」と教師が判断し、三つ山の現地から帰り、教室で、再度、この質問項目の「『寄島町の人』とは誰のこと？」と聞き返し、「寄島町の人とは、自分の家族や今日話をしてくださった大島先生達も入る」と言うことを理解させた上で、振り返りカードに記入した。その結果、評価結果2・3に97%の子どもが達することができた。評価結果1の子ども2人に対しては、個別に教師と一緒に考える時間をとることにより、三つ山に対する地域の人々の思いを自分なりに考えることができた。そして、次の活動に進んだ。

(2) 学習活動2 三つ山や三つ山まんじゅうについて調べ、発表をする。

① 指導・学習の過程

おみやげに三つ山まんじゅうを作ることを決めた子どもに「じゃあ、作ろうか。」と投げかけたところ、「作り方がわからんのにできん。」「調べんとできん。」という反応が返

ってきた。そこで、三つ山まんじゅうの作り方だけに限定せず、三つ山のこと、いろいろなまんじゅうのこと、あんこのことなど調べる範囲を広げることで、多様な調べ活動を期待した。まず、調べたいことをノートに書き出し、どんな方法で調べるかも考えた。尋ねてみると、本物の三つ山まんじゅうを食べたことのない子どもがたくさんいたため、本物の三つ山まんじゅうを食べてみることを始まりとし、調べ活動が始まった。おいしかった粒あんについて調べる子ども、前時までに教わった三つ山のことをもっと知りたい子ども、小豆について資料を見つけた子ども、などがでてきた。調べる方法としては、図書館の資料、家庭での聞き取り、三つ山まんじゅう販売店に出かけていってのインタビュー、前年度に作った4年生からの資料収集などである。調べてきたことを自由形式で思い思いに表現し、発表会を行った。発表会は学年全体を三つのグループに分けて行った。

② 評価結果

10月3日 わくわくノート（関心・意欲・態度①）

10月7日 学習カード①の①（技能・表現①）

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
関心・意欲・態度①	三つ山や三つ山まんじゅうについて進んで調べようとする。	48人	12人	0人
技能・表現①	三つ山や三つ山まんじゅうについて調べたことを、分かりやすくまとめている。	31人	24人	5人

③ 指導の改善と実施

調べてみたいことをノートに書く活動では、特別な支援がなくても調べてみたいことが自分の言葉でノートに並び、48人の子どもが関心・意欲・態度①の評価基準3に達し、残る12人の子どもも評価基準2をクリアしたので、次の活動に進んだ。まんじゅうを製造・販売している方に尋ねたい項目が多く出てきたが、見学が実現できなかった。

そこで、調べ学習のとりかかりとして、三つ山まんじゅうを実際に見て、調べて、食べてみる活動を用意し、子どもがその後の調べ活動を意欲的に取り組めるよう配慮した。また、「まんじゅう」に関する図書館の資料の充実をお願いしておくことで一人一人が充実した活動となるように配慮した。学習カードへのまとめでは、技能・表現①の評価結果3の31人の中に、内容ごとに整理しながら、字の大きさや、色遣い、挿絵を使ってまとめるなど、見てわかりやすい工夫もみられた。また、分からない言葉をそのまま使うのではなく、意味を尋ね、自分に分かる言葉になおして記録しようとする子どももあった。この活動は個別の活動になっていたが、このような友達のよさを全体に紹介する場を設ければ、分かりやすくまとめる技能の向上につながったのではないかと思う。評価基準1の子ども5人については、順番に付き添い、まとめかたのヒントを示したり、適切な資料と一緒に探したりするなど個別で対応する時間をとった。それぞれに調べたいことをまとめた発表用の学習カードが完成し、次の活動である「発表会をしよう」の活動につながった。

④ 評価結果

10月9日 学習カード①の②（関心・意欲・態度①）

発表場面の観察（技能・表現①）

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
関心・意欲・態度①	三つ山や三つ山まんじゅうについての発表を進んで聞こうとする。	28人	24人	8人
技能・表現①	三つ山や三つ山まんじゅうについて調べたことを、分かりやすく発表することができる。	31人	25人	4人

⑤ 指導の改善と実施

関心・意欲・態度①では友達を発表を進んで聞く手だてとして、分かったことを書く振り返りカードを用意した。子ども達は新しく分かったことは書きにくく、発表に関する感想をたくさん書いていた。友達を発表を聞いた感想も、「進んで聞こうとする」になると判断し、感想も数に入れてよいこととし、評価基準を変更した。評価結果1の8人は、振り返りカードに書くことは難しかったが、机間巡視をしながら対話をする、分かったことや感想が言えた。カードのみの評価でなく、行動観察や対話を含めて評価することを考えさせられた。

技能・表現の目標「わかりやすく発表」を声の大きさをポイントに評価した。少人数での発表会にしたので緊張も少なく、調べたことを一生懸命発表できた。技能・表現①の評価結果1の4人は、日頃からもなかなか大きな声での発表ができにくい子どもである。この場での直接の支援は難しかったが、個人内での変容をほめ、今後、普段の生活の中で自信をもって発表ができる機会を意図的に増やしていくよう指導の継続を図ることを確認して次の活動に進んだ。4人の子どもは、感想の中で、「〇〇さんの声はよく聞こえてよかった。」と友達の表現の良さについて記述しているので、お手本にしたい目標をもつことができたと考える。

(3) 学習活動3 1回目のあん作りをする。

① 指導・学習の過程

前時までに調べて発表したことの中から、グループで誰のレシピを使うのかを相談し、第1回あん作りがはじまった。あんを作る活動中は、保護者ボランティアをお願いし、子どもの活動を細かく記録してもらうこととした。これは、教師があん作りの失敗を予想しており、後の1時間でその原因を探る手だてとなると考えたからである。子どもは自分たちのグループのレシピに沿って意欲的にあんを作り、それぞれに完成させた。お世辞にもおいしいといえない粒あんであったが、その甘さからか、ほとんどの子どもが、「おいし

いあんができた。」というのである。芯の残った堅いあんを自分たちは大成功と思っている。そこで、保護者ボランティアにお願いし、本物のあんと比べてどうかの審査をしてもらった。「小豆がまだ堅いから×」「色は三つ山まんじゅうのあんにそっくりだけど芯が残っているよ。△」子どもは、この判定を食い入るように見つめた。そして納得した。船穂小学校の友達におみやげとして持っていき食べてもらうには、今日できたあんは合格ではなかった。「失敗の原因は何かな。まず、自分で考えてからグループで相談してみよう。」という、教師の投げかけに対し、一人一人が本気で考え、グループでの相談となった。保護者ボランティアには話し合いに加わってもらい、子どもの考えを受け止めながら、失敗の原因についてアドバイスをしていただいた。

② 評価結果

10月17日 あん作りの場面の観察

振り返りカード③-②

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
関心・意欲・態度②	友達と協力しながら、あん作りに取り組む。	16人	41人	3人
		31人	23人	6人

③ 指導の改善と実施

初めての、あん作りとあって、子ども達は目を輝かせながら活動に取り組むことができた。関心・意欲・態度②上段の評価結果1の3人は、日頃から初めての活動に対しては消極的な子どもである。友達と一緒に直接あん作りはできないものの、そばでずっと友達の様子をうかがうことはできていた。この日の日記から、直接活動はできていなかったが、それぞれに「楽しかった。」「失敗したので、次はがんばりたい」などの記述が見られたため、次の活動の意欲につながる教師のコメントを書いて次の活動に進んだ。関心・意欲・態度②下段は振り返りカードによる評価結果である。「協力したこと・がんばったことを書きましょう」の欄を設けたが、子どもには書きにくかったようである。評価結果1の6人は授業後にゆっくり時間をとり、対話での振り返りをすると、全員ががんばったことを教師に話すことができ、評価2となった。また、二つの資料から一つの観点を評価しているので、どちらか一つにしぼるか、二つの資料をあわせた評価にしてもよかったのではないかと思う。

④ 評価結果

10月17日 振り返りカード③-③

対話

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
思考・判断①	自分たちの活動を振り返り、自分なりのおいしいあんを作るひみつを考えている。	39人	21人	0人
		41人	19人	0人

⑤ 指導の改善と実施

思考・判断①では、評価結果3に67%の子どもが達することができ残りの子ども全員が評価結果2になった。はじめに「成功した」という思いが審査会で覆され、「ペケ」をもらったことが、後に自分たちの活動を振り返るときの意欲につながった。対話によって一人一人に「失敗の原因は何だったかな」と問いかけると、グループで相談したり、保護者ボランティアのアドバイスを聞いたりしたことをもとに、全員が自分の言葉で答えることができていた。これは、話し合いの後、振り返りカードにまとめていたためと思われる。

あん作りとともに話し合いにも時間が予想以上にかかったため、振り返りカードを書く時間が保証されていなかったことは反省点であるが、全員が課題を持ち次の活動に進むことができた。

(4) 学習活動4 2回目のあん作りをし、あん作りのひみつをまとめる。

① 指導・学習の過程

1回目のあん作りを通して、子どもはグループでの課題を見つけることができ、2回目のあん作りに向けて意欲をもっていた。この時に、地域のあん作りの名人さんとして、「寄島町のおばあちゃん」に来ていただくようにした。老人福祉センターに依頼し、9グループに1人ずつ合計9人の方に来ていただくことになった。名人さんはとても意欲的で、事前に「顔合わせ会」を開くように要請があった。そのため、1回目の「あん」の味ききや、2回目のあん作りの計画など、グループで自主的に打ち合わせができ、互いに親しみもわいてきた。あるグループでは、圧力鍋を使つての「あん作り」をしようということになり、名人さんも子ども達も、2回目のあん作りに大きな期待をよせた。当日は、名人さんによっては、「マイなべ」や「昨夜から水につけておいたあずき」をもってきてくださるなど、9人のそれぞれの思いをいっぱいにした活動が始まった。本単元はあん作りに課題解決を期待しているため、皮はあらかじめ教師がつくっておいたものを使用してまんじゅうにした。グループにより、できあがりの時間に差がつき、時間調節に苦労したが、子供たちは、名人さんたちと一緒に初めて、「自分たちの作った三つ山まんじゅう」を完成させ、とても満足そうだった。出来上がったまんじゅうは、名人さんと一緒に会食をし、名人さんとして触れ合うことができた。

② 評価結果

10月23日（振り返りカード④-①）

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
思考・判断①	名人さんと一緒に活動する中で、おいしいあんを作るひみつを見つけている。	13人	40人	7人

③ 指導の改善と実施

この活動では、地域のおばあちゃんたちととても楽しい交流の時間をもちながら、あん作りのひみつを見つけることができた。思考・判断①の評価結果2・3を合わせると88%にも達するというので、この活動はあん作りのひみつを見つけるにはとても有意義な活動であったと思われる。評価結果1の7人の子どもは、活動の中でおいしいあんを作るひみつは一人では見つけることができなかったが、グループの友達に教えてもらうことで、評価結果2となり、次の活動に進んだ。

④ 評価結果

10月23日（振り返りカード④-②）

（振り返りカード④-③）

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評 価 結 果		
		3	2	1
知識・理解②	三つ山まんじゅうが寄島を代表する和菓子として、地域の人に親しまれていることに気づく。	31人	24人	5人
思考・判断②	名人さんの話を聞いて三つ山まんじゅうに対する人々の思いをまとめている。	34人	25人	1人

⑤ 指導の改善と実施

本活動の2回目のあん作りでは、教師の予想に反しておばあちゃんボランティアとの親睦が深まり、とてもよい雰囲気の中で活動が広がっていった。急きよ、あんの試食会のこの会はおばあちゃんとの交流を深める会と設定し直し、ゆったりとした気持ちで過ごした。そのため、会食会の終わり頃になると、どのグループからも、「ありがとうございました。」という声が聞こえてき、中には別れがつかなくてすすり泣く子ども達や、おばあちゃんが持っていた紙に走り書きしたお手紙をいただいて、どのグループも大騒動になったが、教師はその光景を目を細めて見ていた。しかし、この会食の中でねらいとしていた「三つ山まんじゅうが寄島を代表する和菓子として、地域の人に親しまれていることに気づく。名人さんの話を聞いて三つ山まんじゅうに対する人々の思いをまとめている。」という内容が達成できなかった。そこで、このねらいを達成するために「三つ山」や「三つ山まんじゅう」を熱く語ってくださる方をお招きし、話を聞く活動を設けた。

知識・理解②では、31人の子どもたちが熱心に話を聞き、評価結果3に達した。評価結果1の5人の子どもたちは、授業の後の対話により、「三つ山まんじゅうが寄島を代表し、地域の人に親しまれている和菓子だ。」と言うことを思い出すことができた。

思考・判断②の評価結果1の1人の子どもは、精神的に落ち着かない子どものため、気持ちの落ち着いた時に話を聞いてやりながら、教師と一緒に「三つ山まんじゅうに対する人々の思い」を考えた。教師は子どもたちの活動をしっかりと観察していくことで、次の

活動はどういう活動になるか、どんな支援が必要かが分かってくる。願いとしては、どの活動も今回のように、評価結果1の子どもが0というようになって欲しいと願う。

⑥ 評価結果

10月23日（学習カード2）

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
技能・表現 ①	自分たちの経験や名人さんの話をもとに、おいしいあんの作り方をまとめている。	22人	38人	0人

⑦ 指導の改善と実施

第1回目のあん作りで「失敗」、第2回目からボランティアティーチャーに来ていただいて「成功」と言う活動を組んだため、子ども達はおいしいあんの作り方をまとめることができたと思う。評価結果を見ても分かるように全員の子どもの評価結果3で評価結果1の子どもは0であった。

(5) 学習活動5 自分で試食するまんじゅうを作る。

① 指導・学習の過程

名人さんに教わり、あん作りのひみつを見つけた前時をうけて、いよいよ今度は自分たちだけの力でおいしいあんを完成させたいという願いが強まった。第3回目のあん作りである。また、がんばって作った三つ山まんじゅうは、今までお世話になったボランティアティーチャーにも試食してもらおうという子どもの願いのもと、三つ山のことを教えて下さった大島先生、三つ山まんじゅうの話をして下さった安原先生、第一回あん作りで協力いただいた保護者ボランティア、そして第二回目あん作りで教わった名人さん（地域のおばあちゃん）を招いての試食会の準備をすすめた。あん作りがはじまると、子どもは名人さんたちに教えていただいたひみつを生かしながら、芯のないやわらかいあんの完成にむけて協力して活動した。第一回目の失敗から学んだひみつと名人さんから教わったひみつが一致していないグループは、多少の混乱が見られたが、あんの完成に向けて、グループで相談しながら進めていった。本単元はあんづくりに課題解決を期待しているため、皮はあらかじめ子どもと一緒に作っておいたものを使用してまんじゅうにした。どのグループも今度は砂糖を入れるタイミングを慎重に図り、第一回目とは比べものにならないあんに仕上がった。塩加減が強すぎたり、まだ少し芯が残っていたりしたグループもあったが、お客様を招いた試食会の中で「がんばってつくったね。」「おいしいよ。」とほめていただいたことにより子どもは満足感を味わうことができ、おみやげのまんじゅう作りに意欲をつなげることとなった。

② 評価結果

10月29日 振り返りカード⑤

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
関心・意欲・態度②	発見したあん作りのひみつを生かして、友達と協力してまんじゅうを作ろうとする。	45人	13人	2人

③ 指導の改善と実施

まんじゅうを作り試食をする4時間の活動の最後を書く振り返りカードにより関心・意欲・態度②を評価するように計画していた。しかし、ボランティアティーチャーを招待してのパーティーの時間の都合で、まんじゅう作りの3時間終了後に振り返りカードを書いた。後の子どもの感想から「がんばったことや、協力したことを書きましょう」の設問は、書きにくかったという意見が多かった。しかし、書き始める前に「4つ書けるようにがんばりましょう。」と教師が投げかけたので子どもがめあてをもって振り返りができ、4つかけたからうれしかったとの感想も添えている。本学習の前に、今日の振り返りでこんなカードを書くからと紹介していれば、もっとスムーズに振り返りができたように思う。振り返りにも見通しやめあてをもつことが効果的だと感じた。評価結果1の2人については、後に対話によって本時の振り返りを行い、がんばったことの思い出しができ、おみやげにもっていくまんじゅう作りの活動に進むことができた。時間の都合とはいえ、振り返りカードを書くタイミングについては課題が残った。できたまんじゅうを試食してできばえを実感したり、満足感をしっかり味わってからの振り返りがより適切だと考える。

(6) 学習活動6 おみやげに持っていく三つ山まんじゅうを作り、まとめをカードに書く。

① 指導・学習の過程

前回の「自分で試食するまんじゅうを作る」を受けて、いよいよ最後の「おみやげの三つ山まんじゅう作り」の活動が始まった。子どもは、今回までに、「自分で調べた三つ山まんじゅう作り」、「名人さんと一緒に三つ山まんじゅうを作って、おいしいあんの作り方のひみつを知り、名人さんとも仲良しになり、試食会をした三つ山まんじゅう作り」と、小さな胸にたくさんの思いを詰めこんできた。そして、この単元の発端となった「船穂小学校の友達が喜んでくれるおみやげ—三つ山まんじゅう—を作ろう」のまんじゅうの作り方も分かった今、やる気100%以上でまんじゅう作りに臨んだ。前回、けんかばかりしていた2班は見事なチームワークぶり。初めて、アズキを前日に水にかした1班、などなど。ボランティアティーチャーや名人さんに聞いたこと、教えていただいたことなどを、一生懸命駆使して、三つ山まんじゅうを完成した。味も形も包装も、最高のできばえだった。そして、11月1日におみやげの三つ山まんじゅうを持って、船穂小学校との第2回目の交流を成功させた。船穂小学校の友達が「おみやげの三つ山まんじゅう」を食べ

てくれる時、そばで心配そうに、でも、自信をもって、見守りながらも、どの子どもも必ず聞いていた。「おいしい？」って。もちろん、船穂小学校の友達は、みんな、「お・い・し・い！！」と、笑顔で返事だった。

まとめでは、三つ山や三つ山まんじゅうに対する自分の考えをカードに書き、自分の生活の反省や課題を考えた。

評価の観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		3	2	1
関心・意欲・態度②	おみやげに持っていくことを意識して、三つ山まんじゅうを作ろうとする。	42人	18人	0人
思考・判断②	今までの活動を振り返り、三つ山や三つ山まんじゅうに対する自分の考えをカードに書いている。	39人	21人	0人

③ 指導の改善と実施

三つ山まんじゅう作りの最後ということで、子ども達も思い入れがたくさんあり、自分の力を最大限に生かしての活動が行われた。各グループとも、「いろいろな作業をする時も、できるだけ、手分けをし、分担するように。」などと、今回の活動にめあてをもって行動することができた。

関心・意欲・態度では、活動⑤の関心・意欲・態度と比較することができた。全体として、評価基準は上がっている傾向だが、中に下がっている子どももいた。これは、振り返りカードを書くとき、今回の方が一文を詳しく書くように努力したために、時間の関係で、書いた文の数が少なくなり、意欲の向上に反して評価基準が下がってしまった子どもも多かったためである。この点についての配慮が必要であると思った。

思考・判断では、じっくりと時間をかけて考えさせたため、どの子ども達も自分の考えがよく書けていた。中には、これからの自分の生き方にも触れている子ども達もおり、その子ども達の振り返りカードを紹介することで、他の子ども達にもしっかりと広めていった。

関心・意欲・態度も思考・判断も評価結果1の子どもが一人もいなかった。このこともこの単元が良かったことと考えて良い資料だと思う。

2-2 自己学習力の向上に向けた評価の工夫

2-3 外部への説明責任に向けた評価の工夫

(1) 単元の総括的評価結果

本単元における観点別の総括的評価は、「関心・意欲・態度」については学習活動1-①、3-②の総和で、「思考・判断①」については学習活動2-①で、「思考・判断②」については学習活動1-①、2-②、3-②の総和で、「技能・表現」については学習活動1-②で、「知識・理解」については学習活動1-①と2-②の総和で行うことにした。

なお、考察に際しては、評価結果3は80%以上相当、2は60%～79%相当、1は59%以下相当の達成状況としてみなすことにした。

① 「関心・意欲・態度」について

評価基準 観点(評価場面)	3	2	1	合計
関心・意欲・態度① (学習活動1-①)	57人	1人	2人	60人
関心・意欲・態度② (学習活動3-②)	42人	18人	0人	60人
①+②	99人	19人	2人	120人

上の表の結果から「関心・意欲・態度」の評価「3」であった子どもは99人と、全体の83%を占めている。このことから、三つ山や三つ山まんじゅうについて強い関心をもって調べ、友達と協力しながら意欲的に三つ山まんじゅうを作ったことがうかがえ、十分な学習効果があったと判断できる。これは、船穂小学校の友達に、おみやげとして寄島の名物を持って行ってあげたいという気持ちが単元全体を支えていたためと考える。また、活動の前半には2人いた評価「1」の子どもが0人になったことは、活動が進むにつれて意欲的に取り組み、関心・意欲・態度の観点の目標は十分に達成できたと考える。

② 「思考・判断」について

評価基準 観点(評価場面)	3	2	1	合計
思考・判断① (学習活動2-①)の人数	41人	19人	0人	60人
思考・判断② (学習活動1-①)の人数	31人	27人	2人	60人
思考・判断② (学習活動2-②)の人数	34人	25人	1人	60人
思考・判断② (学習活動3-②)	39人	21人	0人	60人
①+②	145人	92人	3人	240人

上の表から、思考・判断①自分たちの活動を振り返り、自分なりにおいしいあんを作るひみつを見つけるという難しい評価基準にもかかわらず、評価「3」の子どもが41人(6

8%)と半数以上を占め、残りの子どもは全員評価「2」に達しており、評価「1」の子どもは一人もいなかった。この結果を導いたものとして次の点があげられる。一つは、できたあんを子ども達は成功と考えていたにもかかわらず、「本物と比べて」「おみやげにもって行くには」と投げかけられると全員失敗であったこと。ボランティアティーチャーに審査をしてもらい結果が分かったこと。失敗の原因を振り返る方法として、まず自分で次にグループの友達と一緒に、そして、見てもらっていたボランティアティーチャーと一緒にいったことである。あん作りの失敗の原因を一人一人がきちんととらえるまでの過程が無理なく行われたことにもあると考える。そして、評価資料として、対話を用いたことにも大きく左右された。振り返りカードには、自分の考えを書くことができない子どもも、対話では分かったことや気づきを話せることで、学習効果を十分に反映している評価結果と考える。

思考・判断②の三つ山まんじゅうを通して地域のよさを再発見することに関する評価結果からを見ていくと、学習活動が1, 2, 3と進むにつれ評価「3」の子どもは31人, 34人, 39人と次第に増えていき、反対に評価「1」の子どもは2人, 1人, 0人と減っていることに注目できる。これは、学習が深まるにつれて子どもの地域へよせるの思いも深まり、我が町寄島について考え始めていっていることが分かる結果となった。学習のまとめである学習活動3-②で、評価「1」の子どもが0人になっている。

このようなため、全体としてみると、思考・判断は評価2以上が237人(99%)となり、学習の成果は十分に達したと考えられる。

③ 「技能・表現」について

評価基準 観点(評価場面)	3	2	1	合計
技能・表現① (学習活動1-②)	31人	24人	5人	60人

表より、評価「3」であった子どもは半数で、評価「2」の子どもを合わせると、調べたことをわかりやすくまとめることは計55人(92%)が達成できている。資料を十分に用意しておき、家での聞き取りも行ったことがこのような学習効果を生むことになったものと思われる。反面、評価「1」の子どもが5人(8%)いた。個別の表現活動となったのでまとめるテーマもさまざまになり、時間を確保したにもかかわらずこのような結果になった。個別対応の困難さを残した結果になった。

④ 「知識・理解」について

評価基準 観点(評価場面)	3	2	1	合計
知識・理解① (学習活動1-①)	32人	25人	3人	60人
知識・理解② (学習活動2-②)	31人	24人	3人	60人
①+②	63人	49人	8人	120人

表から、知識・理解「①」「②」いずれも半数以上の子どもが評価「3」になっており、「2」もそれぞれ25人、24人となっている。学習活動①では三つ山まで出かけていき三つ山にくわしい大島先生に、学習活動②では実物を見せて頂きながら三つ山まんじゅうのことを大切にしておられる安原先生をお迎えし実際に話を聞くことで、地域を代表する特色あるもの「三つ山」「三つ山まんじゅう」であるということの理解が深まったものと考えられる。

このようなため、知識・理解全体としても評価「2」以上が112人（93%）の高率となっている。お二人の先生の話しぶりや人柄を通して地域の人々の思いや願いまでも知ることができたと考えられ、ボランティアティーチャーを招いての話は地域教材の知識・理解のねらいを達成するのに非常に有効であったといえよう。

反面、評価「1」の児童が計8人（7%）のいた。評価資料として2つの場面とも振り返りカードを使用し判断したことでこの結果を生んだものとする。振り返りカードで評価する場合、自分の考えが書けることが大きく関わってくる。後に、時間をとりじっくり話を聞くと、この子ども達の中にも自分の言葉でわかったことを話すことができ、評価「2」に相当する答えが返ってきた。このような点も踏まえ、知識・理解については十分に達成できたとする。

（2）個人内評価結果

次に、A児、B児の2名を事例にしながら、個人内評価の特質について検討することにする。そのため、まず、2人の児童の＜個人評価結果表＞を示すと、次のようである。

＜個人評価結果表＞

		学習活動（1）		学習活動（2）		学習活動（3）		評 定
		①	②	①	②	①	②	
A 児	関意態	3	2 2	2 1		3	3	A
	思・判	2		3 3	2 3		3	A
	技・表		1 2		3			B
	知・理	2			2			B
B 児	関意態	3	3 1	2 2		2	3	A
	思・判	2		2 2	3 3		3	A
	技・表		3 2		3			A
	知・理	2			2			B

注：評定は、総括的評価結果に基づき、Aは80%以上相当、Bは60%～79%相当、Cは59%以下相当の達成状況を示している。

① 縦断的評価

A児の評価結果を、大きく学習活動（1）と学習活動（2）、（3）の2つに分けて考えてみると、学習活動（1）では、関心・意欲・態度は高めの評価ではあるが、他の3観点に比べると低くなっている。しかし、学習活動（2）、（3）になるにつれ、関心・意欲・態度は次第に高い評価となり、他の3観点の評価も上がっている。本児が調べる活動に比べて、実際にまんじゅうを作りながら活動する方が学習効果の向上により効果的であ

ったものと思われる。

一方、B児は、学習活動（１）においても、学習活動（２）、（３）においても比較的に安定した評価結果を得ている。

なお、このように安定している傾向の子どもが他に３９人（６５％）いた。これは、おみやげに持っていくために地域を代表するおまんじゅうを作るという意識が活動全体を支えるために効果的だったためと思われる。

② 横断的評価

A児は、関心・意欲・態度では、学習活動（２）の最初は３であったが次第に２、さらには１と下がり、学習活動（３）では３と伸びを示している。

このように学習活動（２）で評価がそれまでの３から２に下がった子どもは他に４１人（６８％）おり、そのうち、学習活動（３）で３の高い評価を示した子どもは２５人（４２％）いた。学習活動（３）で評価が上がってきたのは（２）の活動で試行錯誤しながら、何とか自分たちの力で問題を解決しようとして自分で見通しをもって活動に取り組めることができるようになったことと、おみやげに持っていく日がせまり、活動に活気がでてきたためであろうと思われる。

思考・判断では、安定して高い評価をとっている。

なお、A児と同様に、評価Aの１５点以上は他に３９人（６５％）いた。これは、思考・判断の目標を達成するために地域のボランティア・ティーチャーから話を聞かせてもらったことと、あん作りの失敗探検による問題解決 学習への意欲づけができたことによるものと思われる。

技能・表現に関しては、A児は１－２－３の伸びを示している。調べたことをまとめる学習活動（１）と体験したことをまとめる学習活動（２）の違いがこのような評価結果を生んだものと思われる。

知識・理解では評価２を維持している。学習活動（１）も学習活動（２）もボランティア・ティーチャーの話から地域のことを理解する活動であり、どちらも良いボランティア・ティーチャーのため、本児も熱心に学習し理解できたためと思われる。

一方、B児の関心・意欲・態度は、学習活動（１）の最初は評価結果３であるが、次の活動で下がり、最後に２－３となっている。本児の場合、感想を書くことが苦手であるため、学習活動（１）ではこのような結果であったが、しかし、回数を重ね、感想を書く活動に慣れてきたため評価も上がったと考えられる。なお、このように評価結果が一旦落ちて最後に上がった子どもが全体で３６人（６０％）いた。

思考・判断では、本児の評価結果は２－２－２－３－３－３というように活動の後半に評価が上がっている。活動を重ねるごとに自ら進んで考えようとする態度が養われたこと、また、おみやげの三つ山まんじゅうにするために地域のよさにも目を向けるようになってきたことがうかがわれる。なお、このような類似傾向を示す子どもが他に４人いた。

技能・表現では、本児が調べたり、体験したことをまとめる力が高いまま推移していることが分かる。なお、このような類似傾向を示す子どもが他に４人（７％）いた。

知識・理解では、本児は学習活動（１）、（２）ともに評価２となっている。他の観点の評価がAであるのに知識・理解がBとなったのは、本児がどちらかといえば自分たちの

活動を伴うものにはよく反応する反面、知識・理解のように話を聞いて理解する受け身的な活動にはやや難があるためと考えられる。なお、このような類似傾向を示す子どもが他に14人(23%)いた。